

チャイコフスキーの歌曲

「祝福あれ、森よ」(1880)は、孤独な巡礼者が自身を取り巻く世界のすべてに祝福を捧げ、静かに旅を続ける。詩はアレクセイ・トルストイによる(文豪のトルストイとは別人)。「再び、前のように、ただひとり」(1893)は、深い寂寥感に包まれたチャイコフスキー最後の歌曲。詩はまだ無名の学生だった詩人ダニル・ラートガウスによる。「騒がしい舞踏会のなかで」(1878)は、舞踏会の喧騒のなかで美しい女性に一目惚れしてしまった男の歌。詩は A.トルストイによる。「ドン・ファンのセレナード」(1878)は、威勢よく啖呵を切るドン・ファンの口上を歌ったもの。詩は A.トルストイ。

ラフマニノフの歌曲

「昨日私たちは会った」(1906)は、悲劇的な情感を込めて愛の破局を描く。詩はヤーコフ・ポロンスキーによる。「夢」(1893)は、遠い故里への望郷の念を歌ったハイネの詩に付曲。「いや、お願いだ、行かないで」(1892)は、ロシア象徴主義の詩人ディミトリー・メレシュコフスキーの詩をもとにした失恋の歌。

ムソルグスキー:《死の歌と踊り》

ムソルグスキーの友人だった詩人ゴレニシチェフ＝クトゥーゾフの詩に、1875～77 年にかけて音楽を付けた作品。4つの死が描かれており、第1曲「子守歌」は幼い子供、第2曲「セレナード」は若い乙女、第3曲「トレパーク」は貧しい酔っ払いの老農夫、第4曲「司令官」は戦場に斃れた若い兵士たち。いずれも語り部による情景描写のあと、死神が一人称で言葉巧みに死へ誘う構成になっている。

エミールス・ダールジンシュの歌曲

1901 年、ラトビアの故郷リガに戻ったダールジンシュは、作曲や同時代の音楽批評などでラトビアの音楽界に貢献したが、34 歳の若さで亡くなった。「その時を、その瞬間を教えて」(1905)は、恋の諾否を問う歌。同年代に生きたラトビアの詩人ヤーニス・ポルクスの詩による。「わたしの幸せ」(1903)は、素朴な愛の歌。「スペインのロマンス」(1905)は、プーシキンの詩を用いたロマンスで、異国の夜に見初めた美しい女性を讃える。

ヤーゼプス・ヴィートルスの歌曲

ヴィートルスは、ラトビアの「クラシック音楽の父」とも言われ、民族的ロマン主義を主導した人物。「あの静かな夜を今でも思い出す」(1911)は、過ぎし恋の一夜を想うセンチメンタルな歌。「蘭の夢」(1918)は、同時代ラトビアの詩人フリツィス・バルダの詩による怪奇幻想にみちた歌。「聞いて、きれいな目をした少女よ」(1903)は、19 世紀ラトビアの詩人エドゥアルド・ツァイボーツの詩をもとに、愛する娘に若かりし頃の妻の面影を見出す男を歌う。

アルフレーツ・カルニンシュの歌曲

カルニンシュは、サンクトペテルブルク音楽院でダールジンシュとともに学んだラトビアの作曲家。「思うに……」(1901)は、ラトビアの政治家で作家でもあったアンドリーフス・ニードラの詩による、劇的な緊張をはらんだ悲しい愛の歌。

シューベルトの歌曲

「さすらい人の月に寄せる歌」(1826)は、さすらい人が天空をさすらう月への憧れを歌う。詩は 19 世紀オーストリアの詩人ヨハン・ガブリエル・ザイドルによる。「死と乙女」(1817)は、マティアス・クラウディウスの詩にもとづく、死神と乙女との対話。シューベルトはのちにこの旋律を弦楽四重奏曲第 14 番の第 2 楽章で用いた。「春の小川のほとりで」(1816)の作詞はシューベルトの友人ショーバーで、愛らしい佳品。「魔王」(1815)は、ゲーテの詩を読んだシューベルトが一気に書き上げた名作。

R.シュトラウスの歌曲

「献呈」(1885)は、19 世紀オーストリアの詩人ヘルマン・フォン・ギルムの詩に付曲した、演奏会の定番レパートリー。作曲当時シュトラウスはまだ 10 代後半だったが、書法はすでに完成しており、優美な旋律が心を打つ。「ああ悲しい、不幸なる者よ」(1889)は、男の滑稽な妄想をコミカルに歌う。歴史学者でもあったドイツの作家フェリックス・ダーンの詩に付曲。「私はおまえを愛する」(1898)は、リーリエンクローンの詩による愛の歌で、熱い情熱がほとばしる。